下野の高遠石工

柏村　祐司

はじめに

徳次郎石工は、腕が良いとの評判がある。徳次郎地内の石蔵の窓飾り等には他の地域にはないような華麗な彫刻が見られる。徳次郎石が大谷石に比べきめ細かく、かつ堅く微細な彫刻に適していることがあるが、石工の腕前が華麗な彫刻を生み出したのである。このように徳次郎石工は、評判が高いが、その背景には江戸時代、長野県伊那地方を中心に活躍した高遠石工の影響があったのではないかといわれている。そこで、とりあえず、栃木県内における高遠石工の活躍について調べようということになり、筆者がその役に任じられた。

筆者は、栃木県教育委員会文化課勤務時代に、教育委員会が実施した栃木県内の野仏調査の調査結果の取りまとめと『下野の野仏』の執筆と編集を行った経緯がある。したがって栃木県内の野仏については、それなりの知識を持ったが、こと高遠石工については名前を知ったくらいであり調査・研究の実績はない。幸い民俗研究仲間の田村右品、松浦一行、小林秀夫の三氏が高遠石工について調査研究をされ、それぞれ田村右品は「下野の石工―碑塔類銘による」『鹿沼史林第21号』昭和57年（以下「下野の石工」を、松浦一行は「栃木県における信州高遠石工による石造物」『栃木県立博物館研究紀要第５号』1988年（以下「信州高遠石工」)、小林秀夫は『下野にのこる高遠石匠のあしあと』私家版　昭和62年を執筆している。ここでは田村右品の「下野の石工」および松浦一行の「信州高遠石工」をもとに「下野の高遠石工」について報告したい。

１　下野における高遠石工による碑塔類の数　昭和56年11月30日現在…田村右品「下野の石工」より

⑴　栃木県内における石工名が確認された碑塔類

「下野の石工」によれば、栃木県全体で石工名が確認された碑塔類の総数は214基である。栃木県きっての碑塔類調査マニアであった田村右品が、調査した数量は計り知れないが、数多くの碑塔類を調査したのは確かである。その彼をもってしても石工名が彫られた碑塔類が栃木県全体で214基というのは、極めて少ないものと言える。ちなみに旧日光市の場合、『日光の石像美術』（日光市教育委員会　平成８年）には調査碑塔類総数976基が掲載されているが、そのうち石工名が彫られているのはわずかに８基である。このことからしても石工名が彫られて碑塔類の数の少なさが知り得よう。

それでは、なぜ石工名を彫った碑塔類が少ないのだろうか。例えば、貴重品を保管する蔵の場合は棟木に大工名が、彫刻屋台の場合は一部の彫刻品に彫刻師名、掛け軸の場合は絵師の名前がそれぞれ記されていることが多いが、これらに比べてみても石工の名が彫られている碑塔類の数は少ない。蔵や彫刻屋台、掛け軸などは、碑塔類に比べると数が少なく、製作費用も高価なもの、換言すれば価値高い物が多く、製作者の名を記すことにより価値の高さを､および製作者の名を記すことにより責任の所在を示したものと考えられる。これに対し、碑塔類は、蔵や掛け軸などに比べ製作数がはるかに多いばかりでなく、１基当たりの製作費用も格段に安価であることが多く、したがって手数をかけてまで石工名を彫ることはないものとされたからではなかろうか。

このように石工名が彫られた碑塔類は、極めて数少ないが、そうした中で高遠石工およびその系統の石工（註１）の名、あるいは信州とだけ彫られた碑塔類の多さが目立つ。総数214基のうち高遠石工の名が彫られたもの、およびその系統の石工の名が彫られたもの27基、信州とだけ彫られたもの19基、都合46基を数え全体の約21％をしめる。

註１　古賀志村（現宇都宮市）に北条と名乗る石工がいる。高遠より古賀志村に定住した石工およびその子孫である。

⑵　高遠石工の名を彫り込んだ理由

ところで、高遠石工とは、信州高遠藩領内出身の石工をいう。彼らは優れた腕を持ち、江戸時代初期より全国各地に出向き、出先で石仏や、鳥居、石塔、石橋など様々な石造物を作った石工である。彼らは、製作物に信州高遠の誰それと出身地と名前を彫り込む風習がある。それは、優れた技術を持ちそれを誇りとする石工ゆえ、名を彫り込み彼らの存在を知らしめるとともに宣伝効果を高めようとをしたこと、および後から

やって来る高遠石工に対して自分たちの実績を残す意味があったことからと考えられる。なお、信州とだけ彫られている碑塔類は、高遠藩領内出身の石工ではないが、高遠の石工の系譜を引く信州の石工が、高遠同様に技術の素晴らしさを誇示するために、控えめに「信州」とだけ彫ったものと思われる。

2　高遠および高遠の系統を引く石工、ならびに信州石工（以下、高遠石工）の製作による碑塔類の製作年・製作地・製作物…田村右品「下野の石工」より

⑴　製作年

・宝永元年（1704）　１基　藤原町（地蔵）
・享保12年（1727）　６基　矢板市（地蔵）那須町（宝きょう印塔）黒磯市（４・地蔵）
・延享元年（1744）　２基　藤原町（地蔵・灯籠）
・延享２年（1745）　１基　那須町（地蔵）
・延享４年（1747）　１基　大田原市（手洗）
・寛延２年（1749）　２基　那須町（宝きょう印塔）
・宝暦２年（1752）　１基　南那須町（宝きょう印塔）
・宝暦12年（1762）　１基・信州福島　大田原市（灯籠）
・明和３年（1766）　１基　矢板市（宝きょう印塔）
・明和４年（1767）　１基　粟野町（灯籠）
・明和７年（1770）　１基　大田原市（灯籠）
・安永７年（1778）　６基　大田原市（灯籠）
・安永８年（1779）　３基　粟野町（鳥居）喜連川町（宝きょう印塔２）
・安永９年（1780）　４基　喜連川町（灯籠２）茂木町（地蔵２）
・天明８年（1788）　２基　今市市（宝きょう印塔）
・享和３年（1803）　１基　粟野町（鳥居）
・文化９年（1812）　３基　北条文次郎　宇都宮市古賀志（手洗い３）
・文化12年（1815）　１基　藤原町（灯籠）
・文化13年（1816）　１基　日光市（月山碑）
・文政４年（1821）　３基　矢板市（橋供養３）
・天保10年（1839）　１基　北条新右衛門　古賀志（唐獅子）
・嘉永３年（1850）　１基　北条三郎左衛門　古賀志（石橋）
・年不明　　２基　１点塩谷町船生（宝きょう印塔）　１基　北条新右衛門重明（唐獅子）

栃木県内には、高遠石工が製作した碑塔類が全部で46基が確認されている。そのうち製作年がわかるのは44基であり、不明な物は２基である。44基の製作年を見ると宝永元年（1704）から嘉永３年（1839）の95年間であり、100年に満たないさして長くもない期間である。

高遠石工が全国各地に出稼ぎに出かけるようになったのは、元禄期・17世紀末頃からで、藩の財政難解消策として出稼ぎを奨励したことによるものであるという。一方、高遠石工の出稼ぎが衰退に向かうのは、幕末から明治初期である。衰退の最大の原因は、江戸幕府の崩壊に伴い藩が消滅し出稼ぎ奨励策が無くなったことが考えられるが、一方、各地に在地の石工が多くなり出稼ぎによる高遠石工の活動が困難になったことも考えられる。栃木県における高遠石工の製作物が、宝永元年（1704）から嘉永３年（1850）の間に見られるのは、まさに高遠石工の隆盛・衰退の変遷を物語るものといえよう。

⑵　高遠石工による製作物

・灯籠　　13基
・地蔵尊　　10基
・宝篋印塔　　10基
・手洗い　　４基
・橋供養碑　　３基
・鳥居　　２基
・石橋　　１基

・月山碑　　１基
・唐獅子　　２基

高遠石工による製作物では、全部で46基が確認されている。種類別に見ると９種類あり、灯籠が13基で一番多く、次いで地蔵尊10基、宝篋印塔10基と続き、この３種類が全体の約67％をしめる。その他手洗いが４基、橋供養碑３基、鳥居２基、唐獅子２基、石橋１基、月山碑１基となっている。

⑶　栃木県内高遠石工製作物の所在地

・大田原市　８基
・宇都宮市　６基
・矢板市　　５基
・粟野町　　５基
・藤原町　　４基
・喜連川町　４基
・那須町　　４基
・黒磯市　　４基
・茂木町　　２基
・今市市　　２基
・南那須町　１基
・日光市　　１基
・塩谷町　　１基

高遠石工の製作物の所在地は、13市町におよぶ。製作物の所在地は、高遠石工の進出地（活動の場）ということでもある。18世紀初頭、すでに全国各地には石工が活躍している時代であり、後発の旅職人としての高遠石工が進出できる地域は、まず、競争相手となる在地の石工の希薄な地域、および活動の地の近くに適当な石材が得られる地域であることが基本的な条件と考えられる。上記の大田原以下の市町は、いずれも栃木県北部に位置し、かつ山間地あるいはそれに近い地域である。石工の生計が成り立つためには、まず、需要の多い地域、つまり町場に活動の拠点を構えるのが自然である。一方、町場に構える石工は、常に材料の石材を保管し需要に応えようとしているのに対し、店を構えない旅職人の高遠石工は、材料の石材を保管する余裕はない。したがって、旅職人の高遠石工は、在地の石工が希薄であること、材料となる石材が得られやすい山間地あるいは､大きな河原石が点在する川が近くにあることを条件に進出したものと考えられる。上記の大田原以下の市町は、高遠石工が進出するに理に適った地であったのであろう。

なお、宇都宮市に６基の高遠石工の製作物が見られるが、これは宇都宮市内でも古賀志町に集中所在するもので、安永年間（1772 ～ 1780）に高遠石工が古賀志町に移住し、その後も子孫が古賀志町を拠点に活動した結果による。なお、古賀志町における高遠石工については、現在、調査中であり調査終了後に改めて報告したい。

3　高遠（信州）石工の出身地…松浦一行「信州高遠石工」より

田村右品「下野の石工」には、石工の出身地については高遠とあるだけであるのに対し、松浦一行「信州高遠石工」には、集落名も記述されている。ここでは「信州高遠石工」をもとに述べる。

図１「信州高遠石工」に記され確認できた高遠石工の出身地

松浦一行「信州高遠石工」に掲載された高遠石工の製作になる碑塔類は、全部で36基である。そのうち19基に詳細な地名が記され、その地名の数は15地区である。横川村と栗之木立村の場合は、国土地理院の地形図で確認できなかったが、残りの13地区は確認することが出来た。確認できた13地区を国土地理院の地形図に図示

したのが図１である。

図を見ると上牧と福島は、天竜川左岸の平地に位置するが、それ以外は、赤石山脈に水源を発する藤沢川および三峰川が作る谷間に位置する。こうした谷間に位置する集落は、耕地が少なく山林に資源を求めざるを得ない生産性の低い地域である。その結果、現金収入を求めて出稼ぎに依存することになった。加工に適した石に恵まれ石材加工技術を身に着けた石工たちは、藩の奨励政策も相まって各地に出稼ぎに出たのである。

※太字は国土地理院地図で確認できた地名、 斜め字は確認出来なかった地名　地名の右に掲げた数字は、栃木県内で確認された碑塔類の数である。

横川村　　1基
山室川辺村　　1基
福島村　　2基
栗之木立村　　1基
上牧平　　4基
中条　　1基
片倉村　　1基
非持村　　1基
藤沢荒町村　　1基
御薗村　　1基
荒町　　1基
勝間村　　1基
弥勒村　　1基
黒河内村　　1基
溝口村　　1基

⑷　**製作月…松浦一行「信州高遠石工」より**

製作月とその碑塔類数

正月　　２基
冬　　２基
３月　　２基
４月　　２基
５月　　１基
６月　　１基
７月　　２基
８月　　１基
９月　　２基
10月　　２基
11月　　２基

高遠石工による碑塔類の製作月について見ると、通年を通して製作がなされていることがわかる。一つの碑塔類を製作するには何日もかかるであろう。ましてや在庫の石を抱えることの少なかったであろう高遠石工の場合、石の切り出しから製作まで行わなければならず、１か月以上もその地に留まって製作したものと思われる。こうして見ると高遠石工の場合、農閑期を利用しての単純な出稼ぎとはおもわれず、出稼ぎといえども長期間にわたるものであり主要な現金収入源になっていたものとも思われる。

終わりに

徳次郎の石工は、腕が良いとの評判がある。その背景には、高遠石工の影響があったではなかろうか、との疑問がきっかけとなり栃木県における高遠石工について調べることになった。鍵を握るのは、栃木県内における高遠石工の活躍時代と徳次郎地内ないしは近隣において高遠石工が活躍した形跡である。活躍時代についてみると高遠石工はおもに1700年代が中心で1800年代は少ない。しかも江戸末期までであり明治期には及ばない。

さて懸案の徳次郎石工への高遠石工の影響についてであるが、結論を言ってしまえば、田村右品、松浦一行の

調査からでは影響があった可能性は考えられない。というのも、富屋地区には本会員の池田貞夫氏著・発行『富屋の石造文化材』（平成19年）によれば、「信州高遠」といった銘が刻まれた石造文化財がない。前述したように高遠石工は、その業績を残すために「信州高遠」といった銘を刻むがそれが確認できないということは、高遠石工が富屋に来て活躍した可能性はなかったとしか言いようがない。それではどうして高遠石工が富屋に進出してこなかったのであろうか。それは先の『富屋の石造文化材』によれば、富屋地区には江戸初期の寛文４年（1664）から安永10年（1781）の江戸中期において５３基が確認されている。ということは高遠石工が栃木県に進出し盛んに活躍する1700年代には、富屋地区において在地の石工が活躍していたことは十分考えられ、したがって高遠石工は在地の石工がいない石工空白地帯に進出したということからすれば在地の石工が活躍していた富屋地区には進出しづらかったのであろう。

なお、宇都宮市古賀志町には、江戸時代正徳元年（1711）から天保10年（1711）にかけて北条甚内と名乗った高遠石工およびその系譜を引く者（註）が石造文化財の製作に当たっているが、彼らの活動は当時の古賀志村という狭い範囲を中心としたものであり、徳次郎の石工との接点は確認できない。

註

・古賀志町北条文次郎文書『家伝記３』（池田正夫『古賀志の里歳時記』所収）に「正徳元年（1711）卯年信州之石工**忠右衛門**と云う者　甚左衛門ニて越年為差置候処　當山之石細工ニも可成也と石工ヲ召連黒石山ノ石ヲ見立　割始置ニ付切出　三郎左衛門家継ニナル」とある。

・古賀志町北条聡家（高遠石工・北条甚内の子孫）墓地　墓碑に「當村江四十有余年相渡此間所々ニ渡世ス　□當村太郎兵衛断絶ノ跡明和四亥年　新市場江家作シ右名跡ヲ立北條ト改メ猶　當村江四十有余年相渡此間所々ニ渡世ス　□當村太郎兵衛断絶ノ跡明和四亥年（1767）新市場江家作シ右名跡ヲ立北條ト改メ猶為相続養子同國北原村常右衛門江譲　安永三年本國江立戻　生國信州高遠中伊那郡藤沢荒町村　石工柿木甚内」とある。

・古賀志町日吉神社境内に狛犬があり側面に「願主北条三郎左衛門　祭主大柿□□　石工北条新右衛門　天保十歳己亥　十月」とある。

参考文献

・田村右品「下野の石工―碑塔類銘による」『鹿沼史林第21号』　昭和57年
・小林秀夫『下野にのこる高遠石匠のあしあと』私家版　昭和62年
・松浦一行「栃木県における信州高遠石工による石造物」『栃木県立博物館研究紀要第５号』　1988年
・池田正夫『古賀志の里歳時記』随想舎　2012年
・池田貞夫氏著・発行『富屋の石造文化材』（平成19年）